学校だより
とき・あかし錦城
2021年（令和3年）
4月16日（第73号）
明石市立錦城中学校

一週間が過ぎました

学校長　谷郷　昌弘

新学期が始まって一週間が過ぎました。生徒の皆さんが元気に登校してくれる姿を見るのは何よりもうれしいものです。昨年の今頃は臨時休校がスタートし、この先どうなるのだろうという不安と２カ月の間に学校として何ができるかという焦りの中にいました。授業動画を発信しながらも、やはり対面での授業ができないもどかしさは消えませんでした。

今年度、生徒全員にタブレット端末が配備され、対面の授業の中でも積極的に活用する取組が始まります。教員よりも操作に詳しい人もいるでしょう。互いに教え教えられのスタートとなれば、却って好ましい流れのようにも感じます。「主体的・対話的な深い学び」は当然ながら生徒の皆さんが学びの主人公です。生徒の皆さんにとって受け身が多かった学習のありかたを変えていく一年にしなければいけないと思います。

そこで思ったことは、日本人の好きな「空気読め」についてです。空気を読みすぎて、自分の思っていること、考えていることを表現するのをやめる。場の空気にそぐわない言動に神経質になる。大人の人も子どももお年寄りも。「同調圧力」という言葉もよく聞くようになりました。世界に積極的に出ていこうという時代に、これは日本人の弱点でもあると以前から指摘されてきました。この傾向に、タブレット活用は一石を投じるきっかけにならないかと密かに期待しています。

意見を闘わせることはケンカではありません。感情露わにやりあうことを勧めているのでもありません。相手の意見を受容しつつ、互いに高めあう。そんなやりとりが日本人の「普通」になる日が来ると信じて、ICT（Information and Communication Technology）が苦手な私も努力したいと思います。

すっかり葉桜ですが…

桜の花も姿を消し、すっかり「葉桜」になりました。

桜ははかなさや散り行く美しさに目が行きがちですが、桜にとっては花が咲いて散るのは生きていくために当然の行為。むしろ、花が散って葉が出てからが命の本番と思っているでしょう。これから夏の光を思い切り浴びて、自分の中身を充実させていきます。

私たちはどうでしょうか。かっこよく、かわいく、きれいに人に見られたい。それはそうですよね。できることならそうであってほしいと誰でも思うでしょう。

でも、外見にばかり気が行って、中身が後回しになっていませんか。中学生の今、充実させるものは何でしょう。ん～何でしょうかねえ。（おうちの人は「勉強」っていうでしょうねえ。でも、自分で考えてね。）

中庭に虹とハート

中庭の花壇がきれいに咲きそろっています。用務員さんがデザインし、丹精込めてお世話してくださった花壇です。

うらうらに照れる春日にひばりあがりこころ悲しもひとりしおもへば
春の野にかすみたなびきうらがなしこの夕かげに鶯鳴くも
わがやどのいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕べかも

（三首とも大伴家持）

1000年以上昔の人も、春は「うれしいような、かなしいような」複雑な思いにとらわれていたようです。今の言葉でいうところの「春愁（しゅんしゅう）」。思春期であればなおのこと、わけのわからぬ憂いに捕まってしまう日もあります。みんなそうやって大人になっていきます。説明できない、自分にしかわからない感覚。いま、みなさんは「サナギ」となって静かに闘っているんです。相手はもちろん自分です。